

連載 情報システムの本質に迫る 第133回 首相、官僚、マスメディアの論理

芳賀 正憲

人気タレントのほっしゃん。こと俳優・星田英利氏の“なりきり”ツイートが評判になっています。例えば6月3日の次のツイートには、2700人から「いいね」がありました。「わたくしが、カンヌ国際映画まつりで…あ、“さい”ですか、映画祭でパリ…パルムドールに輝いた“万引き家族”についてコメントを出さないのはですね、そもそも、そんなに凄いことなんですか？いいですか、いいですか！家族でたかだか万引きですよ。わたくしはですね、わたくしは夫婦でそれ以上の…」

情報社会ではツイートが、封建時代の落首の機能を進化させています。

森友・加計問題は、今や首相、官僚、マスメディアだけでなく、市民すべての倫理観と論理思考のあり方に問いを投げかけているように思われます。

御用記者の解説によると、首相が加計学園獣医学部の新設要望をはじめて知った時期に関して、官邸内で非常に綿密に検討を重ねた上で、今治市が特区申請をした2015年6月から、加計学園が事業者として認定された昨2017年1月に変更したとのこと。だからこれは、論理構成のしっかりした完璧なものですよと主張したいのですが、客観的には、これは異様な決定です。

たしかに、はじめて知った時期を昨年1月にすることにより、文科省や愛媛県文書に見られる特区認定への首相関与や、認可申請業者との度重なる会食による大臣規範違反、贈収賄疑惑等をすべて払拭することができます。その代り、首相はうその発言をしたという批判を受けなければなりません。

官邸では綿密にダメージコントロールを行なったと考えられます。認定への首相関与や大臣規範違反、贈収賄疑惑は、明らかなら即アウトです。それに比べて、うその発言は、証人喚問でない限り法的責任を問われる恐れが少なく、たとえ文書に記録が残っていても、そんなことを言った記憶がないとか、別の意味で言ったのだと否定して、水掛け論に持ち込み、時間切れを待つことが可能です。日本のマスメディアが、米国のようなファクトチェックをしないで、両論を対等に扱う傾向があることも、このような選択を助長します。

首相が加計学園獣医学部の新設要望をはじめて知った時期は、現在では愛媛県文書の出現により、以前言明されていた2015年6月よりさらに前の、同年2月25日まで遡るとされています。文書には、この日、首相と加計理事長が面談、加計氏が学部新設を目指すことを説明し、首相が「新しい獣医大学の考えはいいね」と応じたと書かれています。首相と加計理事長は、直ちに面談の事実を否定しました。

この事件の奇妙なのは、その後の推移です。

5月下旬、加計学園が、首相と理事長が面談したという、うその情報を県と市に伝えたというコメントを発表、県庁に謝罪に訪れた学園事務局長は、なぜか笑いながら「その場の雰囲気、ふと思ったことを言った」と語りました。

しかし、首相と加計理事長の面談は、行われることが事前に予告されており、県と加計学園の打ち合わせは、面談結果を報告したいという加計学園の申し入れにより行われたものです。面談結果、首相秘書官から資料提出の指示もあり、もし面談がなかったとすると、前後のつじつまが合わなくなります。加計学園事務局長の、ふと思いついてうそを言ったという発言は、発言自体うそではないかという疑惑がもたれています。

この1件のみだと水掛け論になるかと思われませんが、首相が関わった可能性が指摘される事実は、この件も含め、次のように多岐にわたって存在します。

① 2015年2月、安倍首相と加計理事長が面談、加計氏が学部新設を目指すことを説明し、首相が「新しい獣医大学の考えはいいね」と応じたことが、愛媛県の文書に書かれています。

② 2015年2月～6月、首相秘書官の柳瀬氏は、加計学園関係者と獣医学部新設について3回面談をしています。首相の指示もなく、また首相への報告もなく、首相の分身である秘書官が、特定の民間人（しかも首相の親友関係者）と、官邸で3回も面談することは、あり得ないと見なされています。

③ 2015年3月の愛媛県文書に、「安倍総理と加計学園理事長が先日会食した際に、獣医師養成系大学の設置について地元の動きが鈍いとの話が出た」との記載があります。この結果、加計学園関係者に、愛媛県、今治市の職員が同行して、4月2日、首相秘書官の柳瀬氏のところに説明に行くことになりました。

④ 2015年4月2日、柳瀬秘書官との面談結果を記録した愛媛県文書に、「獣医学部新設の話は総理案件になっている。なんとか実現を、と考えているので、今回内閣府にも話を聞きに行ってもらった」と記載されています。

⑤ 2016年9月9日、文科省次官の前川氏は、首相補佐官の和泉氏に官邸に呼ばれ、「総理は自分の口から言えないから、私が代わりに言う」として、獣医学部設置の手続きを早く進めるよう求められました。

⑥ 2016年9月26日、内閣府審議官・藤原氏との面談を記録した文科省の文書に「平成30（2018）年4月開学を大前提に、逆算して最短のスケジュールを作成し、共有いただきたい」「これは官邸の最高レベルが言っていること（むしろもっと激しいことを言っている）」と書かれています。2018年4月開学を前提にすると、事実上、ライティングしている加計学園以外に対応できなくなり、公正な競争条件が保てなくなります。

⑦ 2016年10月、文科省内に、なぜそんなに急ぐのかという声があり、再度藤原

審議官に面談したところ、「開設時期は動かせない」「これは総理のご意向だと聞いている」との発言があったことが文科省の記録に残っています。

⑧ 2016年10月21日、官房副長官の萩生田氏が文科省局長と面談、「総理は『平成30（2018）年4月開学』とおしりを切っていた」と手続きを急ぐよう求めたことが、文科省の文書に書かれています。

これらの項目1件ずつについては、当事者が、記憶にないと言ったり、別の意味で言ったのだと釈明して、事実関係を否定し、水掛け論になります。しかし上記8項目のコンテキストから判断すると、加計学園獣医学部の新設要望を昨年1月にはじめて知ったという首相答弁が正しいかどうか、多くの国民には明らかです。

それではなぜコンテキストをもとにすると、明確な判断ができるのでしょうか。

コンテキストによる判断は、複数の記号の多段階の意味理解にもとづく記号現象と考えられます。パースは記号論を、記号、対象、解釈項の3項で整理しました。記号は解釈項を媒介にして対象の意味につながります。機械情報を記号としたとき、最初の解釈項が社会情報と見なされます。解釈項はそれ自体新しい記号としてそれと対象をつなぐもう1つの解釈項を生みます。コンテキストの誕生です。それがまた新しい記号として、・・・というように、パースは記号の意味作用を非常にダイナミックにとらえています。コンテキストも高度化していくのです。

このようにダイナミックなプロセスがあったとしても、コンテキストの意味理解は意識として直観的なものです。一方パースは、解釈項の成立を、アブダクション、演えき、帰納の推論機能によると見なしています。それでは、コンテキストの意味理解の、意識としての直観と、アブダクション、演えき、帰納の推論機能とはどのような関係になっているのでしょうか。

ここで最近の脳科学の知見をもとに大胆な仮説を立てます。

人間が周囲の環境を見渡すとき、毎秒約100億ビットの視覚情報が目の網膜に到達します。しかし、視神経に伝わるのは、そのうちのわずか600万ビットのみであり、大脳皮質の視覚野に届くのは1万ビットだけです。人間の意識に到達するのは、さらにその中の100ビットに過ぎません。大脳皮質の視覚野にある数10億のシナプスのうち、視覚情報の伝達に係るのは、わずか10%です。そこで、残りの90%が何をしているのかが問題になります。実は、外界に関する認識の大部分は、脳の内部での処理から生まれています。人間は外部から得たデータの欠落を、過去から現在に至るまでの膨大な記憶や、部分から全体を推論する能力などを駆使して補っています。残りの90%は、このようにして世界を理解するために使われているのです。（オリ・ブラフマン、ジューダ・ポラック著、金子一雄訳『ひらめきはカオスから生まれる』日経BP社）

大胆な仮説というのは、解釈項を生み出す推論機能が、この90%の能力の中で行われているのではないかということです。

具体的にどのような推論機能が行われているのでしょうか。一例として背理法で考えてみます。

① 首相はまったく与り知らないのに、「首相と加計理事長が面談、加計氏が学部新設を目指すことを説明し、首相が「いいね」と応じた」ことが、愛媛県の文書に書かれる可能性は低いと考えられますが、仮に50%の可能性があるとします。

② 首相はまったく与り知らないのに、首相秘書官が勝手に首相官邸で、加計学園関係者と獣医学部新設について3回面談をし、首相へは一切報告しない可能性は低いと考えられますが、仮に50%の可能性があるとします。

このとき、①と②があわせて起きる可能性は、25%になります。

このように見ていくと、首相がまったく与り知らないのに、①～⑧の事象のすべてがあわせて起きる可能性は、0.4%程度になります。

これらの論理思考と演算は、すべて意識下で行われることになります。それでは、ほんとうに人間の意識下でそのようなことが可能なのでしょうか。ここでは、パースと、動物学者・ローレンツの、人間の思考能力に関する見解を参考までに示しておきます。

パースは、アブダクティブな洞察力が、実は人類進化の過程の中で自然に適應するために人間精神に備わるようになった「自然について正しく推測する本能的能力」であり、人間精神の合自然的（合理的）働きであるという見方を示しています。有限回の推測で正しい仮説を発見できるという（驚くべき）事実からも、人間精神は真理と親近性をもっていて、これがあらゆるアブダクションの根底にある基本的な前提であると主張しています。

また、ローレンツは「人間の理性は、それが備えているあらゆる直観の形式やカテゴリーを含めて、人間の頭脳と全く同じように、自分をとりまく自然の諸法則との絶え間ない相互作用の中で有機的に形成されてきたもの（である）」と述べています。

人間は誰でも、進化の中で培った一定の論理思考能力を意識下に備えており、それが直観的なコンテクストの意味理解として、意識に現れてくると考えてもよいのではないのでしょうか。

連載では、情報と情報システムの本質に関わるトピックを取り上げていきます。

皆様からも、ご意見を頂ければ幸いです。